

題名：戦後台湾における脱日本化と日本観——韓国との比較から——

氏名：森田健嗣

所属：東京大学大学院総合文化研究科、地域文化研究専攻教務補佐員

専攻：地域文化研究専攻（2016年3月現在）

筆者は台湾に関する原稿を書いたことがあるが、同じく日本の植民地支配を経験した韓国朝鮮への理解を得るため本ワークショップに参加した。周知の通り台湾と韓国は日本の植民地支配を受けた経験、戦後の民主化運動への展開や経済発展、それに起因する社会の構造など類似の歴史を持つ。だが1945年の解放以降の韓国社会において、「日本帝国主義の残滓の清算」は一種の定言命令で、最優先された清算の対象は日本語であり、それが民族文化建設の先決課題だった¹。解放以降の韓国社会で「日本」は新たな国民的統合の上でなくてはならない存在となり、韓国ナショナリズムにおいて「日本」は「韓国人」をつくり出す最も重要な道具として機能した²。よって韓国では民主化以前であっても「脱日本」という共通の定言命令のもと国民国家形成が進められたと言えそうである。

ここで筆者の関心に引き寄せると、近年、戦後台湾のおかれた状況について「脱植民地化の代行³」という把握がなされている。これは台湾の脱植民地化は台湾が台湾として自らのアイデンティティや国家の形成という形態で進行したのではなく、中華民国が台湾を「中国化」するという「代行」された形で進行したことを指す。そこにおける「日本」は為政者にとっては日中戦争を戦った相手であるが、台湾の人々にとれば台湾を50年統治した存在であったことを意味する⁴。このことから、戦後台湾の為政者、植民地時代の経験を持つ被支配者の双方に共通する「脱日本化」の定言命令は難しく、戦後台湾では「国民」を創り上げることの困難さがうかがえる。

本ワークショップでは国家記録院ソウル記録館、国史編纂委員会、外交史料館、そして個人で大韓民国歴史博物館を訪れたが、その際の印象は、現代に至るまで「国史」としての確固たる「我々韓国朝鮮の歴史」が存在することを確認できた点にある。一方、戦後台湾の「国史」とは、長らく「中国史」を指した。そこでの記述とは正統的な5,000年の悠久な「中原」の歴史で、かつ「正統中国」に重点を置くことだった。「日本」は日清戦争以来の「国難」をもたらした最大の「侵略者」として位置付けられ、近代史の記憶は国民党史観に取って代わられた。歴史記述の中の「日本」は侵略と虐殺をもたらした8年間にわ

¹ 金哲（田島哲夫訳）『抵抗と絶望——植民地朝鮮の記憶を問う——』（大月書店、2015年）205-206頁。

² 同上書、224-225頁。

³ 若林正文「試論 日本植民帝国「脱植民地化」の諸相——戦後日本・東アジア関係史への一視角——」黄自進主編『東亜世界中的日本政治社会特徴』（台北、中央研究院人文社会科学研究中心、2008b年）290頁。

⁴ 川島真「新時代の日台関係と台湾の日本研究」中京大学社会科学研究所・檜山幸夫編『歴史のなかの日本と台湾——東アジアの国際政治と台湾史研究——』（中京大学社会科学研究所、2014年）46頁。

たる抗日戦争の敵だったからである⁵。

しかも 1950 年代からの国民党中央政府の台湾移転にともなう「中央化⁶」以後は政権による上からの台湾社会に対する一大「中国化」、「中国人になるために学ぶ」(Learning to be Chinese)、つまり本省人⁷にとり外省人⁸の統治エリートが提示する主流文化に同化しなければならなかった⁹。そして国民党政権の公定中国ナショナリズムに基づき、上からの国民形成が強力に進められた。台湾社会の各「族群 (エスニックグループ)」の母語や「台湾的なもの」は、国語 (中国語) と中華のハイカルチャーの下位に位置づけられるものとして貶められた¹⁰。さらに長期戒厳令と白色テロにより言論その他の自由や多くの生命が奪われた。こうした戦後の台湾に国民党政権という戦前の日本との「対照群」が現れたことで、植民地時代に対して相対的に美しい追憶が引き起こされ、植民地期を過ごした台湾人が日本時代に対して「好感を持つ」誘因となったことは、これまでも指摘されている¹¹。

集団のアイデンティティを発達させる要素には「選り取られたトラウマ」(未来に影を落とす過去の惨事)と「選り取られた栄光」(栄光ある未来に関する「神話」)のことで、過去の栄光の再現として理解される)の 2 つがあり、前者は両親や教師などの話によって下の世代へ継承され、次の世代はその出来事の体験なしに過去の世代が味わった苦しみを共有する¹²。戦後台湾では脱植民地化が代行された故に、学校では為政者の歴史観、地理観¹³や敵認識が教育された。そして植民地期台湾の記憶や経験は学校では継承されず断絶し、家庭内ですら下の世代では共有が難しかった¹⁴。しかも街からは為政者の意図に抛り「日本」

⁵ 洪郁如「理解と和解の間——「親日台湾」と歴史記憶——」『言語文化』50、2013年、24頁。

⁶ 若林正文『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史——』(東京大学出版会、2008a年) 75-76頁。

⁷ 1945年以前から台湾に居住する人々で人口上の多数派であり、民主化に依りエンパワメントされる立場にあった。同上書、3頁。

⁸ 1945年以後に国民党政権とともに渡来した人々で、党・政・軍・文化機構において要職を占め、人口上のマイノリティではあるが、戦後台湾国家において本省人に対して構造的優位を占めていた。同上書、3頁。

⁹ 同上書、78頁。

¹⁰ 若林、前掲論文 (2008b年) 289頁。

¹¹ 蔡錦堂 (水口拓寿訳)「日本統治時代と国民党統治時代に跨って生きた台湾人の日本観」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における〈日本〉——植民地経験の連続・変貌・利用——』(風響社、2006年) 29-34頁。

¹² ワン・ジョン (伊藤真訳)『中国の歴史認識はどう作られたのか』(東洋経済新報社、2014年) 76-78頁。

¹³ 王文隆「台湾中学地理教科書の祖国想像 (台湾の中学/高校地理教科書における祖国イメージ) (1949-1999)」『国史館学術集刊』17、2008年、201-246頁。

¹⁴ 洪の引用する映画 (洪、前掲論文)、周の回想 (周婉窈著 (若林正文訳)「二度の「国引き」と台湾——黒住・木宮両氏との対話——」『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』9、2005年、106頁)、藍の研究 (藍適齊 (安部由紀子訳)「台湾における「大東亜戦争」の記憶一九四三～五三年——当事者の不在——」『軍事史学』45(4)、2010年、58-59頁)などを参照。

が払拭され、戒厳令と白色テロが吹き荒れ人々が沈黙を保つなか、そこには植民地時代の被統治者による脱日本化の意思が示されることはなく、それどころか日本たることが自己を保つツールとなった。

本ワークショップでは各機関の訪問を通じて、同じ日本の植民地統治を経た韓国では、民主化以前から「脱日本」が為政者、国民ともに定言命令として共有され、確固たる「国史」としての韓国朝鮮の歴史が語り継がれる様子を観察できた。だが台湾は脱植民地化が代行されたことで、台湾社会全体として旧宗主国「日本」がかつての「敵」の対象や「他者化」されたうえで国民統合の機能として働くことはなく、現在まで「日本」を相対化する傾向が見られる。こうした両者の違いは国民大学校における日本研究の講演でもうかがうことができた。すなわち韓国の日本研究者が実証的かつ誠実に植民地時期に向き合おうとすれば、韓国社会に一般に流布する日本観から批判を受けなければならないためである。現代台湾で同様のことはあまりみられないことから、本ワークショップを通じ両者の差異を若干確認することができた。